

幼児の制止行動の研究

(そ の 1)

堀 内 康 人

(1) 研究問題の発見

幼児保育の場、それが家庭たると、保育園幼稚園たるとを問わず、私共が幼児を取扱う場合に必ず突当る問題の一つは、「どうして幼児は、何事によらず待つことが出来ないのだろうか」という問題である。勿論、すべての幼児がそうであるというわけではないし、待たせ方如何にもよるけれども、一般的にいつて幼児にはそうした傾向があることは確である。幼児、それは待つ事の出来ない動物である、ある学者は例をあげて説明している、「お待ちなさい、今日は駄目、明日連れていってあげましょう」「いやだ、今日連れていって」「駄目です、明日連れていってあげます」「いやだ、今日でなくては」「いけません、ねておきて明日になったら連れていきましょう」、幼児は早速その場でごろりと横になり、目をつぶり、しばらくして目を開き、「ねておきたから、さあ連れていって」と。今日は行くのを我慢し、行くことをさしひかえ、明日までひきのばし待つなどということが幼児にとって大変むずかしいのは勿論のこと、「ちょっとの間でも待つ」ことすら大変にむずかしい。

集団生活に充分なれていない幼児と、話し合いでもしてみたら、「ちょっとの間でも待つ」ことが彼等にとって如何に出来ないことか、又待たせる、待たせ方に色々なコツがあるものだということがよくわかるにちがいない。幼児達は、保育者がなんども「順番にお話して下さい」と繰返すにもかかわらず、言われたことをすぐ忘れ、早く言ってしまわないと、頭の中から言おうとしていることが逃げてしまう、といわんばかりに、お喋りをはじめ、そこで保育者は、「ちょっと待って、誰それさんのお話が終わってから、次の方がお話しをして下さい」を何回か繰返さねばならない有様である。この様な景色は幼児の話し合いの場面にあるだけではない、なにかを観察させる様な時、その他あらゆる幼児の活動場面で、きまって経験することが出来る。

幼児保育の場で私共は、この様なことと関連させて、二つの問題が存在することに気がつく。

其の一 幼児がその行動の直接的な発現をおさえ、その発現を遅らせ待期する、そのしかたが種々様々で、それには年齢差はいうに及ばず、個人差があるということ。

其の二 保育者のやり方次第で、幼児や幼児達の行動の直接的発現を見事に遅らせ、いわば、その場を見事にさばきながら、最終的には幼児や幼児達をして、「うまく待期させ、うまく行動させ」「不平や不満のない様にし」「幼児や幼児達に、精神的なしこりを残させない」様に出来る場合と、そうでない場合、それはひいては保育者の技術的巧拙と極めて関係が深いこと。

この二つの問題である。この様な経験的、実践的事実を、単にその様なものとして放置しないで、何等かの方法で、心理学的に掘り下げることにより、保育技術に於ける経験主義を反省し、ひいて

はそれを脱皮させ、この様な基礎的な問題を一つ一つ研究して行く中で保育技術の体系を立てていくことが是非とも大切である。

(2) 研究をしてゆくための観点

幼児や幼児達が「なにかをしなくて待つ」、保育者の側からいうならば、「なにかをさせないで、或は一たん取やめさせて待たせる」などという問題は、幼児の躰、落ち着きのある子とない子、幼児の興味と関心、動機付け、課題解決、更に幼児の性格や神経症といった問題に関連して研究がなされている様である。

私はこの問題をそれらとはちがった観点、視点から考察していきたい。それは、イワン・ペトロービッチ・パヴロフ (Ivan Petrovitch Pavlov) の古典的な興奮 (excitation) と制止 (inhibition) という高次神経活動 (higher nervous activity) の基本的な二つの機能を土台として、彼が犬について行った諸種の実験、条件反射 (conditioned reflex) 形成のうち、制止に関する実験をもとにして、考察と研究を進めよう。

考察を再び具体的事実にひきもどそう、乳児でも幼児でもそうだが、彼等が「なにかをしなくて」「なにかをしなくなった」という場面を考える場合、私共は、それは「なにかをするために、なにかをしなくて」のであり、「なにかをするために、なにかをしなくなった」という風に考えなければならぬ。「なにかをしなくて」という状況は、「なにかをする機能が制止されている状態」のことであり、それはまた、パヴロフが常に強調した様に、制止は単に興奮をおさえるということではなく、興奮に正しい道を与えるために存在するものである。この考えは極めて大切な考えで、「乳幼児がこの様な条件の中では、もうこの様なことが出来る様になった」という事のおかげには、「この様な条件の中では、もうあの様なことはしなくなった」という制止行動の形成と確立という問題が常に横たわっている。この様に考えて来ると、乳幼児の精神発達、それにともなって起って来る様々な問題を、その現われた側面にとらえることも大切ではあるが、その現われない側面にとらえることも、同様に或はそれ以上に大切なことがわかると思う。それを私は「乳幼児の行動を、その制止行動的側面から考察する」といわせていただくことにする。

這い這いをはじめた乳児は、たたみの上のところがついているものは、手当たり次第にこれをつかみ、口にもってゆく、それに対して母親は「きたない」「いけません」等といいながら、或は発声言語なしに、乳児の口にもっていこうとする物を取上げたり、時には手荒く、時には乳児の手をつねったりする。乳児は、その様な事をしばしば体験する中で、この様な事をするとき、又はしようとするときには必ず同じ様な事態がそのあとにやって来る事を知る様になる。パヴロフの条件反射理論からするならば、一つの事態と本来無関係な事態とが継時的或は同時的にしばしば繰返されるうちに、大脳に於ける物質的基礎として、一時的神経結合即ち条件反射の路が形成されるというわけである。乳児は母親に手をつねられる前に、「きたない」「いけません」という言葉をきけば、更にその前に母親の姿を見ただけで、たたみの上のところがついている物を口にもってゆく事をやめてしまう、即ち高次陰性条件反射の形成という形で、こうした事態が説明される。ところがこうした陰性条件反射がまだ強固に形成されていない場合には、幼児は母親がおらない様な場合、同じ事を繰返す、そこへ母親がやって来る、乳児は口の中でもぐついている所を見付けられ指を突込まれ、いやな思いをして口の中のものを取り出される、結局、母親が見ておる所でもおらない所でも、拾ったものを口に入れると、どの様な事態がやって来るかを自分の行動と結びつけて強く知る様になる、そして、ついには、落ちていたものを拾って口に入れない習慣が形成されるわけである。

次に私共が大いに参考にしなければならない事は、「なにかをしなない様になる」事態についてばかりではなく、「なにかを一時しなないでにおいて、あとになってからやる」という事態についてである。パヴロフはこうした問題については、内制止の実験の中で、延滞制止現象として考察している、即ち「条件反射を形成するに当って、条件刺激と無条件刺激との時間的關係、即ち条件刺激を始めてから無条件刺激の与えられるまでの間隔時は、いくらでもいろいろと出来る、今条件刺激の始まった時間から無条件刺激の来るまでの時間を非常に短かく、1～5秒以内としておくと、こうして形成された条件刺激では、条件刺激が始まるや否や殆んど唾液が分泌して来る。この二つの刺激の間隔時をこれより長く形成してみると唾液の分泌反応の出現は益々遅れてくるようになり、この延滞時間は遂に数分間までにおよぼさせる事が出来る」と⁽¹⁾。

更に彼は延滞反射の形成される速度について次の様に述べている、「延滞反射の形成される速度は、個々の例では、はなはだ変化がある、何よりも先づ第一に動物の個性、すなわち神経系統の性質に關係がある。例えば、或る犬では条件反射の延滞形成は、正しくかつ確実に、しかも容易に達せられるのに、他の犬ではこれと反対に非常にのろくさく形成されるし、唾液分泌は条件刺激の開始から頑固に起こり、この点からなかなか延滞しないのである、また延滞が一日だけの実験でとも角も現われてくるのもあるし、これに反して一ヶ月もつづけているのに、少しも形成のしるしすらないものもある。延滞が速かな犬では、延滞はしばしば睡眠に変化してしまう」と。

私は乳幼児の行動とパヴロフの生理学的な実験を少々大胆に関連させ過ぎはしないか、というをしりを招く事を充分承知の上で論を進めて来たが、こうした生理学的事実はいくまでも心理的事実の基礎をなすものであると考えて、あえてパヴロフの古典的実験のほんの一部分を、それが、これから研究しようとする保育の現場に於ける実践的問題と関連が深いために、ここに引用したまでのことである。

（3） 第一研究のあらまし

(1)に於て発見した、幼児保育の場に於ける二つのテーマの中の其の一のテーマ、即ち、幼児がその行動の直接的な発現をおさえ、その発現をおくらせ待期する、そのしかたが種々様々で、それには年令差はいうに及ばず、個人差があるという問題について先づ考察するが、それに関連して、それが年令差、個人差の問題の以前に、母親の幼児に対する働きかけ方と深い關係があるだろうことを考察し、次の段階でそれを実験的に明らかにしてゆこうと思う。

私共は、保育の場に於ける幼児集団を考える前に先づ幼児個人を考えねばならない。私共が幼児をして或行動にかりたてたり、なにかを伝達、尋問、指示、要求したりする場合多くの場合、幼児に対する「呼び掛け」からはじまる、例えば「誰それちゃん」などは、その代表的なものである。呼び掛けを受ける幼児は殆んどの場合、何等かの行動をしていたり、何等かの状態であったりする。そうした場合、幼児の呼掛けに対する応じ方には二種類のことを考える事が出来る。

(a) 先行の行動を続行しながら、呼掛けに応ずる

(b) 先行の行動を一時的にとりやめて、呼掛けに応ずる

この二つを比較した場合、呼掛けの次にやって来る刺激、例えば命令、尋問、要求、伝達等の言語刺激を、はっきりと受容するためには、(b)の態勢にあった方が有利であることに異論はない。いうまでもなく、呼掛けの次に続く事態が明白に幼児に受容されるためには、まずその呼掛けが、幼児がその時におかれた様々な条件の中で、十分に外制止的刺激となりうる事が望ましい。幼児の側からするならば、その刺激が十分に探求の反射（定位反射）（その内容的、単一的なものとしては回

頭反射、聳耳反射等である)が働き得る様な強さのものでなくてはならない。次に私共は重大な点として考えなければならぬ事は、呼掛けと、それにつづく事態、例えば言語刺激との時間的關係である。パブロフは「なにが刺激となり得るか」という問題の中で、「時間も亦刺激となりうる」ことを強調している。幼児は(a)(b)の形で呼掛けに対応しながら、それに続く時間の中で、次にやって来るであろう事態、例えば命令、尋問、指示、要求、伝達などの言語刺激を待期する、これを図式的に示せば次の通りである。

(c) 呼び掛け+時間+言語刺激

次に私共は、幼児の生活する現実、その中で最も人間的に接触の多いのは、一般的にはなんといっても母親である。図式(c)に関連して、母親の幼児への働きかけの典型的タイプを具体的に考え、差当って一応、次の4つに分類して見た。(註 一は例えば1~5秒位の時間 ——は例えば5~10秒位の時間を表わすものと考えてよい)

Oタイプ (おちついたタイプ)

○○ちゃん—○○ちゃん— (幼児がはっきりと先行の行動を一時的にとりやめるのを見とどけてから) なにしているの— (幼児の返事を待って) ちょっとこちらにいらっしやい。

Nタイプ (のんびりしたタイプ)

○○ちゃん——○○ちゃん—— (幼児がはっきりと先行の行動を一時的にとりやめるのを確認しないままに) なにしているの—— (幼児の返事も待たずに) ちょっとこちらにいらっしやい。

Sタイプ (せっかちなタイプ)

○○ちゃん— (幼児がなにをしているかななどにはおかまいなく、時には呼掛けそのものが幼児の耳に入らないこともある) なにしているの— (幼児の返事もまたずに) ちょっとこちらにいらっしやい。

Aタイプ (荒々しいタイプ)

なにしているの、○○、ちょっとこちらにいらっしやい。(所謂ガミガミと言語刺激をあびせかける様に)

幼児の母親がこれらの分類の或常に同じタイプで幼児に働きかけるなどというわけではないし、勿論様々な状況に応じて働きかけのタイプは当然かわって来るだろうが、たとえ色々な働きかけをしようとも、どちらかといえばOタイプ、どちらかといえばNタイプ、どちらかといえばSタイプ、どちらかといえばAタイプとして性格づけられる様な働きかけの傾向が考えられるという予想を立てたわけである。幼児はこの様な予想された母親の働きかけのタイプとしばしば接しているうちに、それに対応したタイプを幼児自身の中に形成してしまうにちがいないという予想がここに生れて来る。こうした予想にもとづいた幼児のタイプは次の様なものと考えられる。

Oタイプ

呼掛けに対して、確実な探求反射を示し、先行の行動を一時的に制止し、あとに来るであろう事態を落着いて待つ。

Nタイプ

呼掛けに対しての探求反射もくずれ、ずるずると先行の行動を続け、制止もきかないで、あとに来るであろう事態などについては無関心である。

Sタイプ

呼掛けを充分に受容するいとまもなく、従って先行の行動を一時的に制止するいとまもなく、常に次の事態が突然やって来るので、落着きがなくなる。

Aタイプ

売り言葉に買い言葉のたとえの様に、何事によらず、はげしい反抗を示し、人の言う事などには耳もかたむけなくなる。

以上の様な予想にもとづいて研究段階に入ることにしよう。

（4） 研究方法（第一研究）

観察実験法による。プレーセラピー室に幼児とその母親を導き入れる。子供のテストを行なうという事にして、テスト前、一定時間、母子を自由に室内に放置する、室内に配置する人形、玩具その他は必ず一定しておく。観察室より母子の行動を記録し、母子の会話、特に、母の子に対する呼掛けと言語刺激及びその間の時間的關係について客観的にこれを把握する為に、テープレコーダーにこれを収録する。収録されたものを観察記録とてらし合せる。こうしたケースを出来るだけ沢山集める。

この様な資料を整理する中で母親の子供に対する働きかけのタイプを予想とてらし合せて、より具体的に分類しなおし、更に夫々の幼児担当の保育者の所見、及び実際保育場面に於ける幼児の行動観察を行ない、その関連性をたしかめてゆく。これが当面する第一研究のプログラムである。

本紀要では「幼児の制止行動の研究」の序論、大まかな研究の見取図しか書く事が出来なかったが、次の紀要に、その第一研究の結果を発表したいと考えている。以下、第二、第三と研究計画を立ててゆきたいと思う。

（注）

- (1) パヴロフ（林謙訳）：条件反射学 上巻 P. 131
- (2) 同上 P. 132～P. 133